

学内広報

2014.3.25

no.1452



山崎直子さん講演会（知の創造的摩擦プロジェクト）

学部学生を対象とした特別教育プログラム

GLP（グローバルリーダー 育成プログラム）、始動

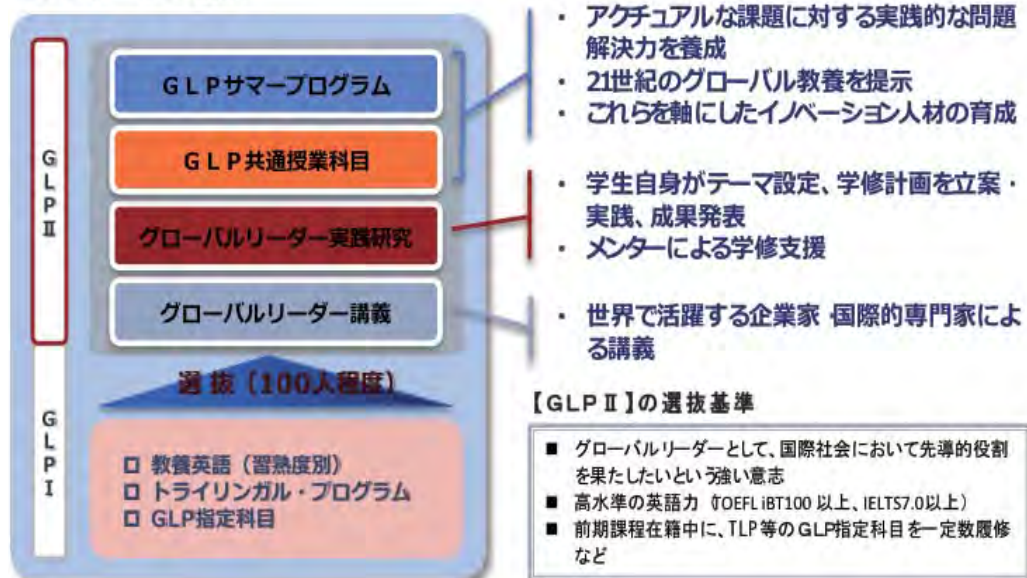
「東大アラムナイ」トピックス2013-2014

卒業生ネットワーク、伸展中

学部学生を対象とした特別教育プログラム

GLP (グローバルリーダー育成プログラム)、始動!

「世界的視野を持った市民のエリート」「タフな東大生」としての
ロールモデルとなるグローバルリーダーを育成します。



GLP の概要

国際社会における指導的人材の育成を目的とした学部学生対象の特別教育プログラム。学部前期課程 (1～2年次【GLP I】) では、トライリンガル・プログラム (TLP) などの多様な語学教育や、世界・アジア・日本に関する深い理解、実践力・課題解決力の育成等を目指す授業科目の履修を通じてグローバルな視点を養います。学部後期課程 (3年次以降【GLP II】) (通称: GEfIL) では、2016年度から、語学力や意欲等によって選抜された学生を対象とした分野横断型の特別教育プログラムを提供。サマープログラム等の国際的な学習体験を組み入れ、授業は全て英語等の外国語で行います。

GLP 推進室が第二本部棟にオープンしました



←推進室に併設された
GEfILラーニング・スタ
ジオ。緑色の床はリスク
ティン先生のセレクト。

グローバルリーダー
育成プログラム推進室
特任教授



ニコラ・リスクティン

ハンプルク大学で
MA修了後、京大、
早大に留学し、ケン
ブリッジ大学でPh.D

トボードと勾玉型テーブルを用意し、海外サ
マープログラムの相談会、発表会、ワークシ
ョップ等に活用していきます。学生面談を行い、
学生の希望と学術プロフィールに合うプログ
ラムに繋がりたいです。今後プログラム数を増
やし、海外大学、企業等とも連携し、インタ
ーンシップ等の企画も行う予定です。

地球規模の課題に直面する現代では世界で
活躍するグローバルリーダーが本当に必要。
高い志を持つ東大生がGLPに参加すればその
力は必ず大きくなります。学部での専門教育
を基礎として、異なるバックグラウンドの学
生が交流することにより、学生が主体的に育
っていくことを期待します。一方、学部を跨
るプログラムの運営には全学の協力が必須。
皆様の協力をお願いいたします。

●プレ GEfIL プロジェクト

後期課程で行うGLP2の通称が
GEfIL (Global Education for
Innovation and Leadership/
ジェフィル)。2016年度からの
GEfILを先取りして今春から実
施する奨学金付き短期海外留学
プログラムがプレGEfILプロジ
ェクトです。ケンブリッジ大学、
ハーバード大学をはじめとする
一流海外大学が提供する11のサ
マープログラムに学部学生を送
り出します。趣旨に賛同した協
賛企業から渡航費の一部 (一人
18～50万円程度) が支援されま
す。なお、リスクティン先生は本
郷近辺に引越し済み。本気です。

を取得しました。その後、15年間ロンドン大
学で日本文学・文化・ジェンダースタディ
ーズを担当し、そのうち約10年間はパークベ
ック・カレッジの日本学科長を務めました。
2011年に久しぶりに日本に戻りました。長年
の国際的な経験やネットワークをGLPの運営
に上手に生かすことができたらと思います。

現在、推進室では、プレGEfILプロジ
ェクトとして11の海外サマープログラムに学生を
派遣する準備を進めています。今回は40人程
度を送り出す予定。1月にオープンしたGEfIL
ラーニング・スタジオには壁面全体のホワイ

現代に山積する世界規模の諸問題の解決に先導的役割を果たす人材を育成するため、
東京大学が満を持してスタートする学部学生対象の特別教育プログラム、
それが、GLPこと、「東京大学グローバルリーダー育成プログラム」です。
推進室長、特任教授、参加学生。プログラムに関わる3人の声でその姿を紹介します。

より
グローバルに
より
タフに

●トライリンガル・プログラム(TLP)

入試の際に配られたパンフでTLPのことを知って申し込みました。小学生の頃に韓国語のインターナショナルスクールで英語には慣れていたので、もう一つ語学をやるなら必要性が高まっている中国語だと思ったのです。関係悪化が取り沙汰される相手について知りたいと思ったのも動機でした。第二外国語でも選択しているので、中国語にはほぼ毎日接していますね。TLPの授業は中国人の先生がほぼ中国語だけで行っています。授業に出ている学生は、中国留学の経験者も多く、語学に限らず積極的な人ばかりで、刺激を受けています。学期終了の打ち上げのときに、もっと負荷をかけても大丈夫という声が学生側から出て、次の授業ではそれまでなかった中作文の宿題が追加されました。柔軟に対応してくれていると感じます。先日図書館で中国映画を観たら結構耳で聴いてわかって、成果を実感しましたね。2年次の夏には南京大学のサマースクールに参加する予定です。将来は外交官になってグローバルに働きたいと考えています。



教養学部文科I類1年

山岸 拓真 さん

GLP 推進室長 に聞きました



グローバルリーダー
育成プログラム推進室長
(副学長)

吉見 俊哉

※1 吉見先生がセンター長を務める大学総合教育研究センターが毎年実施している「達成度調査」(「学内広報」3月11日発行の特別号で全文を掲載)によれば、東大生の約7割が、東大での国際経験に満足しなかったと回答。

※2 サステイナビリティ、グローバルヘルス、グローバルエコノミー、グローバルガバナンス、ピースビルディング、ダイバーシティなどの地球規模の課題を想定。

※3 海外サマープログラムの際、支援金が1人40万円だとすると、200人(2学年)で8000万円が必要。

※4 吉見先生は、GLPのことで悩みながら歩いている際に階段を踏み外し、足を骨折したこともあったとか…。

学生の潜在能力×教員のネットワーク=GLP

グローバルな人材には、実践的英語力に加え、基礎学力、領域横断的な視座からの立体的な洞察力、アクチュアルな課題に対する協働的な問題解決力が必要です。このうち、東大では最後の2点への対応が十分ではなかったと思います。東大生にはもともと高い基礎学力と強い国際化意欲※1がありますから、大学が教育のしくみをより風通しのいいものにすることで、もっとグローバルな人材を養成できるはずです。一方、東大の教員は皆、研究では日常的に国際ネットワークの中で仕事をしています。海外の学会での発表や外国の先生との共同研究などは日常茶飯事です。しかし、それを学部教育には活かせていませんでした。研究面での国際的つながりを教育現場にも活かさない手はありません。

学生と教員の高いポテンシャルをつなげば新しい教育ができる、という思いから出発したのがGLPです。中でも特徴的なのは「グローバルリーダー実践研究」です。自ら研究テーマを設定※2し、計画をたて、調査を行って成果をまとめる。それを全部英語で行います。メンター教員と大学院学生(高度なTA)が個別に学生を指導しますが、その際のやりとりも基本は英語。博士課程には相当数の優秀な外国人留学生在がいますから、彼らも高度なTAの候補になってくれるでしょう。普通は大学院学生が日本語でやることを学部学生が英語で行う。高い要求ですが東大生なら可能です。

GLPには多大な資金が必要※3。そこで、渉外本部とともに企業をまわり支援をお願いしました。世界を相手にする企業ほど国際化の重要性を痛感しています。ある企業では「物足りない」と叱咤されましたが、それは期待を持っている証拠。後日再訪し、ご支援を得られました。私もGLPで少しタフになったかもしれません※4。ただ、成果がなければ支援は続きません。たえず成果を発信して社会に認められなければ、という緊張感とともにGLPを進めていきます。

●GLPは多くの企業の協賛に支えられています

- ・株式会社IHI
- ・旭化成株式会社
- ・アステラス製薬株式会社
- ・エーザイ株式会社
- ・大塚製薬株式会社
- ・JFEホールディングス株式会社
- ・塩野義製薬株式会社
- ・住友商事株式会社
- ・住友生命保険相互会社
- ・武田薬品工業株式会社
- ・東京海上日動火災保険株式会社
- ・東レ株式会社
- ・富士電機株式会社
- ・株式会社三井住友銀行
- ・三井不動産株式会社
- ・株式会社三菱ケミカルホールディングス
- ・三菱重工業株式会社

(2014年3月20日現在/五十音順)

GLPには、多くの企業からご賛同頂き、初年度より多大なご支援を頂くことができました。また、現在検討中の企業も多くあり、支援の輪が広がる予定です。企業の皆様には資金の支援だけでなく、プログラムそのものにも関わって頂く計画です。(渉外本部)

協力：本部学務課 制作：本部広報課 (22031)

「東大アラムナイ」トピックス2013-2014

卒業生ネットワーク、



グレーター東大塾？



2013年5月に開催された「下山塾」のひとつコマ。

「グレーター東大塾」は、広く社会に向けた東京大学の教育活動の一つとして行われている、講義型の生涯学習プログラムです。卒業生が世界的視野に立って公正な社会の実現や科学・文化の創造に貢献し続けるためのしくみとして発足したもので、現実社会に存在する先端的でかつ身近なテーマを毎回取り上げています。

塾長を務めるのは、その分野の第一線で活躍する教授陣。2010年開催の「木の社会の実現に向けて」(塾長・安藤直人教授)を皮切りに、これまでに6回の塾を開講してきました。第7回となる平成26年度春期開催分で塾長を務めるのは、工学系研究科マテリアル工学専攻の片岡一則教授と、薬学系研究科ファーマコビジネス・イノベーション教室の木村廣道特任教授のお二人。日本の誇る世界最先端医療技術の現場をあますところなく伝える講義になりそうです。

定員は30人で、参加費は1人20万円。現在「片岡・木村塾」のパンフ。



入塾申し込み受付中で、応募の締切は4月23日(水)となっています。

<http://tsii.todai-alumni.jp/gtc/>

開催時期	塾名	開催テーマ
2014年5月	片岡・木村塾	「超高齢社会日本を支える医療技術と社会システム」
2013年9月	高原塾	「中進国時代の中国を読み解く」
2013年5月	下山塾	「社会資本のエイジングに対応するロボット技術」



体験活動プログラム？



ニュージャージーのオーガニック農場での体験学習。

学生を「よりタフに、よりグローバルに」育成するため、夏期を中心に学部学生に多様な体験の機会を提供している「体験活動プログラム」。このプログラムには、多くの卒業生がボランティアとして協力しています。

2013年度は、海外で10件、国内で7件の企画提案があり、卒業生企画としては計114名の学生を受け入れました(全体では海外24件、国内51件を実施)。ちなみに、2012年度は海外3件、国内1件の企画を実施し、学生の参加数は計33名でしたから、拡充ぶりは明らかというものです。プログラムの内容の面も、卒業生が働く企業や国際機関などを訪問し仕事の現場を見てもらうもの、現地の大学との交流を行うもの、企業に滞在して農場体験やマーケティング体験を行うインターンシップ型な

ど、徐々に広がりを見せています。

参加した学生からは「貴重な体験を将来に活かしたい」「現地学生との交流により刺激を受けた」などの声が、卒業生からは「大学に対する関心が深まりよい刺激が得られた」との声が寄せられています。

2014年度についても、企画募集の段階が終わり、4月からの学生募集に向けて準備が着々と進められています。学部教育の総合的改革の一環で4ターム制が導入されると、サマープログラムやインターンシップの一段の拡充が必要となることから、海外を含めさまざまな現場で働く卒業生の貢献が期待されます。

2014年度「体験活動プログラム」

海外企画実施予定

NY 銀杏会／さつき会アメリカ	世界の情報発信の中心地ニューヨークの脈動を感じてみよう
さつき会アメリカ	オーガニック農場でのSustainable Agriculture 体験
シカゴ赤門会／さつき会アメリカ	アメリカで事業をすることの素晴らしさとチャレンジ
南加東大会	LAにおける日系人／日本人の歴史を学びドキュメンタリー・フィルムを制作する
欧州フランス赤門会	グランゼコールでの研修、およびパリで働く卒業生から学ぶ／女子学生のためのフランスの文化・ビジネス研修体験
インド赤門会	新興国インドでのマーケティングリサーチ／バンガロールで卒業生と一緒に国際体験／ニューデリー＆ダージリンで卒業生と一緒に国際体験
北京事務所／北京校友会／上海銀杏会	東大生訪中～中国のトップ大学・現地企業等の訪問・交流
上海銀杏会	上海および上海近郊の地方都市を中心とした国際交流体験活動
淡星会(シンガポール)	起業するならシンガポールでしよう

(卒業生室担当分)

伸展中!

知の創造的摩擦プロジェクト?

「知の創造的摩擦プロジェクト」は、東京大学三四郎会、学生団体ドリームネット、キャリアサポート課と卒業生室が共同で企画・運営している東大生のためのプロジェクトです。その活動の主な柱となっているのは、交流会、語る会、講演会の3つ。



随所で真剣なトークが繰り広げられる交流会。

年に2回開催される交流会は、毎回100人以上の卒業生と250人以上の学生が一同に会し、人生やキャリア観について話し合う場として定着しています。卒業生が普段何を考えて生きているのかを聞き、学生が自分の思いをぶつけることで、自分にとっての指針になる価値観を考える絶好の機会なのです。2013年度は、6月と11月にそれぞれ、「なりたい自分を見つける日」と「明日（ミライ）のために今日（イマ）を考える」をテーマに開催されました。

語る会は、より小規模で専門分野ごとに卒業生と話せる場で、こちらにも人気を集めています。講演会は、社会の第一線で活躍している著名



企画統括は学生が担当しました。

な卒業生の先輩を招いて生の声を聞くことで刺激を受け、世代をこえた知の交流を図ろうというもの。2012年12月には、前東大総長で三菱総合研究所理事長の小宮山宏さんが『全東大生に告ぐ』と題した講演会を開催。2014年1月には、第9回として、宇宙飛行士の山崎直子さんが『地上400kmの夢～東大発宇宙へ見えないゴールを目指す旅』と題した講演会を開催しました（聴衆は250人＝満員）。



山崎さんは1996年航空宇宙工学専攻修了。

世代間の「縦」の摩擦と業種間や専門間の「横」の摩擦の両方をカバーする、知の創造的摩擦プロジェクト。摩擦熱が上がりそうな今後にご注目を。

東大セルフ・インベストメント?

卒業生室主催の新しい「学び」のプログラムがスタートしました。その名も「東大セルフ・インベストメント」。キャッチフレーズは「週末の自己投資@東大」です。Creativeで Innovativeなワークショップを週末に開催することによって、メンタル・マネジメントや新しいものの考え方や「気づき」など、自分への投資を促します。

2014年2月1日に行われた第1回のテーマは「なめらかな社会とその敵」。同名の著



書で個人 (individual) ならぬ「分人」(dividual)によって構成される新しい民主主義を提唱した鈴木健さんが、6時間にも及ぶ熱いセミナーを繰り広げました。4月19日には、東大i.schoolによる第2回「集合知サービスのイノベーション」が予定されています。



第1回でトーク・セッションを務めた鈴木健さん。

TFT会員数が3万人に到達

教職員、卒業生を結ぶオンラインコミュニティTFT (TODAI for tomorrow) の会員数が、このほど3万人に達しました。オンラインで世界中の同窓生とつながるだけでなく、東大アラムナイドメインのアドレスが取得できたり、東大出版会の書籍割引があったりと特典もたくさん。未登録の人は損ですよ。

「赤門学友会」の名前が「東京大学校友会」に

2014年4月、10年目を迎えた赤門学友会は、東京大学校友会に名称を変更します。規模が拡大し活動も活発化する中、同窓会団体、卒業生個人、在学生、教職員を包括する「グレーター東大コミュニティ」としてよりふさわしい名が必要だったため。また、国際的に通用する名に、という思いの表れでもあります。

東大三四郎会がファンドで復興エイドを支援

若手卒業生ネットワークの東大三四郎会は、ファンドを創設して被災地復興活動に参加する学生を支えてきました。支援を受けた学生団体「東大・東北復興エイド」は、2011年6月から2000名のボランティアを派遣するなど継続的な支援活動に従事。平成25年度の総長賞を受賞したのは記憶に新しいところです。

教養教育の現場から

第2回

リベラル・アーツの風

創立以来、東京大学が全学をあげて推進してきたリベラル・アーツ教育。その実践を担う現場では、いま、次々に新しい取り組みが始まっています。この隔月連載のコラムでは、本学のすべての構成員がぜひ知っておくべき教養教育の最前線の姿を、現場にいる推進者の皆さんのレポートでお届けします。

正解のない問いに、共に挑む

／全学自由ゼミナール「ブランドデザインスタジオ」

ブランドデザインスタジオコーディネーター
総合文化研究科・教授

真船 文隆



「正解のない問いに、共に挑む」が、全学ゼミ「ブランドデザインスタジオ」の大きなねらいです。正解のある問題に対して一人でじっくりと考え、その結果誰よりも速く正確に正解にたどり着ける東大生が、明確な正解のないテーマに対して問いを立て、グループで議論をして考えをまとめていく、このプロセスを授業では大切にしています。特に「共に挑む」の部分を「共創」とよび、チームの中、チーム間の相互作用を通して何かを学びあい、創出し、合意形成していくスタイルのことを指します。個々が1の力をチームの中で発揮すれば、チームの人数をはるかに超える分の創造力が生まれることを、授業を通して体験します。

東京タワーをリブランディング？

平成23年に駒場Ⅰキャンパスの中に21KOMCEE（理想的教育棟）が竣工しました。ここには、受動的な学びから能動的な学びへの転換を目指したアクティブラーニング仕様の教室（スタジオと呼んでいる）が9室あります。この5階のK502にブランドデザインスタジオがあります。アクティブラーニングの新たな

展開として、博報堂との教育連携の中で生まれたスタジオで、組織的には教養教育高度化機構社会連携部門の中に属しています。なぜ博報堂なのか？ 毎回授業はワークショップ形式で行われ、現役の広告会社社員、ブランド・コンサルタントが、まさに日々の業務で行う手法を用いてファシリテーションを担当しているからです。平成25年度夏学期のテーマは、「東京タワーのリブランディング」でした。スカイツリーが開業し、人々が東京タワーに抱くイメージや期待、存在意義がかわりつつある中で、これから東京タワーはどうあるべきかを様々な側面から捉えなおす、そして現場を観察し、多様な情報を統合・分析したうえで、アイデアを創出しました。その過程では、東京タワーの運営主体である日本電波塔株式会社にもご協力いただき、アイデアのプレゼンテーションは東京タワー内のホールで行いました。

「目に見えないものが現れる」ゼミ

基本的に、授業は木曜日5限（16:30～）ですが、毎回20時30分くらいまでかかります。しかも授業の出席は必須で無断

欠席の場合はその場で不可、毎週デスクリサーチ、フィールドワークなどの課題を与えるということを授業開始時のオリエンテーションで明示したうえで、学生に履修登録をさせます。授業は大変ですが、途中でやめてしまう学生は少なく、この冬学期までに9個のプログラムが終了し、200名を超える学生が単位取得しました。「目に見えないものが成果として現れるという経験は新鮮で面白かった（理ⅠFさん）」「これまで自分が触れたことのないタイプのプロジェクトでし、すごく自分に新たな視点を与えてくれ、自分の視野を広げることのできた3か月でした（文ⅠOさん）」「グループで理解を深めるためには、相手の発言の意図をしっかりと把握しなければいけない。相手の意図が汲み取れていない場合に、意見の違いが出てきて、そのたびに何が問題かを話し合った時間が長かったです（文ⅢMさん）」というのが学生の代表的な感想です。平成26年夏学期は、「未来の「新聞」をブランドデザインする」というテーマで開講します。ご覧になりたいという教職員の方がいらっしゃいましたら、お問い合わせください。



KJ法をもちいた
ワークショップ。



（上）21KOMCEE
K502のブランドデザイン
スタジオとそのロゴ。
（下）ブランドデザイン
スタジオの授業風景。

ききんの「き」

—東大基金で森を動かす—

第11回

黒野 優菜 渉外本部 一般職員

3.11と東大基金

～大学が復興支援のために出来ること～

3.11から3年が経過しました。地震発生直後には、被災地へのボランティアや、募金などを行った方も多かったのではないのでしょうか。東京大学でも義援金を募集し、2011年中に総額1,847万円を被災学生と自治体へ届けました。その後東大基金内に「東日本大震災救援・復興支援プロジェクト」を立ち上げ、247件約1,955万円の寄附を頂いていますが、このプロジェクト、現在もお寄附募集を行っています。

そもそも「被災地の支援のために、なぜ大学に寄附？」というご意見もあるかと思います。被災地では本格的な復興はまだ初段階であり、また原発事故による放射線汚染の問題はいまだ深刻です。大学の知や専門家の力が必要とされる場面は多く、学内には、それぞれの専門分野における研究を活かしながら、一朝一夕に終わらない復興支援活動を行っている研究チームがいくつもあります。工学系の研究チームでは、仮設住宅建設の後も地域のコミュニティに入り、地元の高校生による復興計画をサポートするなどコミュニティ作りの段階まで活動を広げ継続しています。また農学系の研究チームでは、除染技法の開発のため何度も農村に足を運び実証実験に取り組むうち、農家の方が研究のために田地を貸して下さり、現在ではNPO（ふくしま再生の会）と協力して地元の農家と一体となって除染活動に取り組んでいます。

東大基金の救援・復興支援プロジェクトは、被災学生への支援に加えて、このような研究チームが被災地で継続的な活動を行うために役立てられています。東大基金HPの成果報告では、写真と共に現地での活動の様子を掲載しています。是非ともご覧下さい。

震災から3年。この機会に改めて、自分が、大学が今できる支援について考えてみませんか。



田車で泥水を掃き出す除染実験（NPOふくしま再生の会）

東京大学基金事務局 教職員寄附1億円キャンペーン中！

TEL 03-5841-1217 : E-mail kikin@adm.u-tokyo.ac.jp
内線21217 : URL http://utf.u-tokyo.ac.jp/

留学生さん いらっしやい!

第10回

海を越えて東大にきた学生に聞きました。



アメリカ合衆国

ソニ・リア さん

Soni Ria

農学生命科学研究科
(IPADS) 修士課程2年

出身はインドのグジャラート州で9歳からサンノゼで生活。メトロ食堂の「ベジ定食」は彼女の意見が反映されたものだそう。趣味はお菓子作り。

Q. どうして日本に来たんですか？



※カリフォルニア大学サンディエゴ校

UCSD^{*}時代、寮の近くにクラスがあった日本語を選択しました。仮名と漢字のバランスが美しい日本語が気に入って大阪大学に短期留学した際、研究生活を送るなら「チーム」の感覚がある日本がいいな、と思ったんです。

Q. ではどうして東大を選んだんですか？

大阪大学の先生が定年になったので東大と早大と慶大を受けて、日本人の友達やいまの研究室の松本安喜先生と相談して、決めました。



Q. いま研究しているのはどんなこと？



鳥類にかかるニューキャッスル病という感染症の研究です。28羽のニワトリを飼っていて、給餌や床敷で毎日90分はかかりますね。医科研の河岡研究室に進みたいと思っています。

Q. 日本で困るところ、好きなところは？

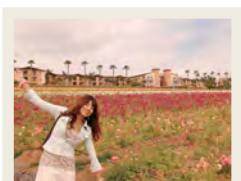
ベジタリアンなので、食べられるものが少なく、ポテトチップばかり食べていました。ラーメンもそばもスープに肉や魚を含みますから。いいと思うのは、店員のサービス精神と、女子も男子もお洒落な人が多いことかな。



Q. サンノゼの自慢を教えてください！



シリコンバレーだからか、学校でIT機器が各種もらえましたよ。ケサディーヤなどのメキシコ料理が充実していて、ホームパーティーが盛んです。写真は約200kmの花畑。デートに◎！



協力：国際センター本郷オフィス 制作：本部広報課

ワタシのオシゴト 第97回

RELAY COLUMN

法学政治学研究科等
大学院係

登島 弘基

毎日たのしいです!



「東大フラミング」というチームで野球しています。

昨年の4月に、東大病院の人事管理担当から法学部大学院係に異動し、もうすぐ1年です。異動当初、仕事内容と一緒に仕事をする人がガラッと変わり、転職したような気分でした。しかし、優しく頼りになる先輩方に支えられ、毎日楽しく仕事をしています。

「ワタシのオシゴト」は、法科大学院の入試業務や成績管理、時間割作成などです。また、学生対応のオシゴトということで、学生自習室に虫が発生した場合は現場まで駆除に走ったり、共有の穴あけパンチが壊れた場合にはドライバー片手に修理したりすることもあります。日々、様々なオシゴトを経験できます。

プライベートでは、前回執筆者の川口さんから紹介いただきました通り、ランニングが趣味です。一昨年は東大病院の初代チャリティーランナーとして東京マラソンに出場し、ファンレイジング活動を行いました。法学部においても何かみんなを巻き込んで面白い事が出来ないかと企んでいます(笑)。



頼もしいみなさんです。

得意ワザ：高い場所にある物を取る。こと。大食い。
自分の性格：「気は優しく、力持ち」らしいです。
次回執筆者のご指名：高瀬恵実さん。
次回執筆者との関係：教務系の飲み仲間です。
次回執筆者の紹介：良い声してます!

Crossroad

産業界と大学がクロスする場所から、産学連携に関する“最旬”の話題や情報をお届けします。

産学連携本部

第100回

いかに大学発技術を
イノベーションにつなげるか?NEDO プログラム「ジャパン・オープン・
イノベーション・プラットフォーム」のご紹介

大学の研究成果の事業化は通常足の長いプロセスで、そのための継続的な資金供給が不可欠であり、イノベーションの加速化には、大学で生まれたテクノロジーと、政府等からの助成金(グラント)やベンチャーキャピタル(VC)等のリスクマネー、さらには事業パートナーとなりうる大企業との橋渡しをする「場(プラットフォーム)」の形成が不可欠となる。

この「プラットフォーム」を成立させるには3つの要件がある。

第一は、特定技術をベースに、最終的には事業化が叶わないことがあることも承知の上で、“ビジネスのニオイ”がする事業化プラン(「ショウケース」)を、たとえ稚拙であっても、まずは仕上げてみるのだ。それによって、パートナーとなりうる大企業や、ベンチャーキャピタル等のリスクマネーの提供者とのキャッチボールを始めることができる。

第二は、実際に事業化プラン作成のために博士課程学生やポスドク(博士研究者)を教育し、起業家候補生として訓練する機会を提供することだ。事業化支援のプロによる個別メンタリング(事業化指南)も欠かせない。最終的に起業家にならなくても、その訓練は彼らがイノベーション人材として大学や大企業で活躍する際にも活きるだろう。

第三は、第一の要件とも関連するが、このプラットフォーム自体がオープンであること。大学、大企業、VC、エンジェル、助成金(グラント)提供者等がこぞって参画できる場としたい。

NEDOの支援を得てスタートした本プログラムは、東京大学産学連携本部と(株)東京大学エッジキャピタルが教育プログラムの提供とメンタリングの手配を主導する形で昨年1月から5月までのパイロット・プログラムを行い、その後本年3月まで後継プログラムが続いた。まだ狭い範囲でのショウケース発表会に留まっているが、この「ジャパン・オープン・イノベーション・プラットフォーム」の試みを何とか拡大し、可能な限り多くのショウケースを生み出すことによって、大きなイノベーションを導くための循環(エコシステム)を構築したい。(各務茂夫)



昨年度の募集チラシ。

<http://www.ducr-u-tokyo.ac.jp/>

インタープリターズ・第80回 バイブル

情報学環・生産技術研究所 教授
教養学部附属教養教育高度化機構
科学技術インタープリター養成部門

大島 まり

科学や技術は感動を与えることができるのだろうか

ソチオリンピックが2月に開催された。スポーツの祭典ともいわれているオリンピックを通して、皆、それぞれ感じるものがあつたのではないかなと思う。

4年に1度というオリンピックの場で、選手は厳しいトレーニングや試合を経て世界の頂点を目指して競い合う。勝負は費やした時間を超えて、あつという間に終わってしまう。選手にとって、満足のいく結果が出る場合もあれば、残念ながらそうでない場合もあるであろう。競技を終え、万感の思いで結果を待つ。その緊張感は言葉で表すことのできないものがあると思う。そして、これらの一連の出来事を見て、私たちは時には感動して涙する。

オリンピックで感じる感動はなんなのだろうか。私自身、熱しやすい性格ということもあるのだが、いつも不思議に思う。一瞬のなかに、凝縮したドラマを見るからなのだろうか。そして、このような感動を科学や技術は与えることができるのだろうか。

以前、「飛行機はなぜ飛ぶのか」というテーマで、研究室で制作したポータブル風洞を用いて高校で出張授業を行ったことがあつた。準備段階ではうまくいっていたのだが、いざ本番という段階で、うんとすんとも言わなくなってしまう。私も、アシスタントの学生も慌ててしまい、必死になって直して、やっと動くようになった。そのハプニングのせいか、授業の出来はいま一つぱつとしなかった。ただ、その後、アンケートを見て、驚いた。「先生たちが必死になって実験装置を直している姿を見て、感動しました」というコメントがいくつかあつたのである。意外なところが見られているのだなとびっくりしたとともに、少しうれしくもあつた。

科学や技術というと無機格的で面白みがないという印象が強いようである。でも、真理を追究する、あるいは製品として開発するのは「ひと」。長年にわたって失敗や試行錯誤を繰り返して、創り出すプロセスは目に見えぬ努力の賜物。その舞台裏を垣間見たとき、人は何かを感じるのではないだろうか。

オリンピックでの感動には及ばないが、科学や技術を通して与えることのできる感動もあるかもしれない。

科学技術インタープリター養成プログラム
<http://science-interpreter.c.u-tokyo.ac.jp/>

救援・復興支援室 より

第34回

本学の救援・復興支援室の最近の状況や、遠野分室の日々の活動の様子をお届けします

救援・復興支援室の活動(2月～3月)

2月～3月	福島県相馬市「育英館・寺子屋」学習支援ボランティア (「育英館」＝相馬市生涯学習会館 「寺子屋」＝相馬市内の応急仮設住宅の集会所)
2月	岩手県陸前高田市「学びの部屋」学習支援ボランティア

ザシキワラシの日常

本部企画課係長(遠野分室勤務)



文：佐藤 克憲

先日、東日本大震災から3年目となる3月11日に、本学大気海洋研究所の国際沿岸海洋研究センターがあり、その関係から本学が震災復旧と復興へ向けた連携に関する協定を締結している岩手県大槌町の、「東日本大震災津波追悼式」に出席してきました。地元の新聞報道によると、一般献花と式典を合わせた出席者は約1,200名ということで、遺族代表として挨拶された方の「(被災者や遺族が)一人一人が一步でも半歩でも前に向かって進んでいかなければならない」という言葉が示しているとおり、悲しみの中にも、町民の皆さんの復興への強い決意が感じられました。

大槌町では、復興が進んだと思えるのはスーパー等の商業施設の再開くらいで、海寄りの災害危険区域住民の移転先確保については、用地買収を進めているものの、相続がなされていない土地や抵当権が付いている土地があり思うように進んでおらず、災害危険区域より内側(山側)の土地区画整理を行う区域のかさ上げ(盛り土)も、必要な用土の約半分を隣町から搬出する関係等で、ようやく先行実施箇所がスタートしたという状況です。

本学は大槌町で、復興計画の策定、地域コミュニティの再生、産業の振興等の支援を行っています。継続してこそ成果が出てくると思われるものも多く、長いスパンで支援を行う必要を感じています。

今回もお読みいただき「オアリガトガンス！」



現在の大槌町
(各所に土を盛り始めている)

http://www.u-tokyo.ac.jp/public/recovery/info_j.html
Email : kyuenfukkou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp
内線 : 21750 (本部企画課)

トピックス

全学ホームページの「トピックス」(<http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/topics/>)に掲載した情報の一覧と、その中からいくつかをCLOSE UPとして簡単にご紹介します。それぞれの記事の詳細は、全学ホームページよりご覧ください。

掲載日	担当部署	タイトル	実施日
2月18日	農学生命科学研究科・農学部	西南大学との国際交流協定調印式を開催	1月8日
2月20日	生産技術研究所	生産技術研究所にて東京大学特許講座を開催	2013年12月13日
2月20日	教育学研究科・教育学部	「第21回教育学部音楽祭」開催	2月10日
2月21日	本部留学生・外国人研究者支援課	第15回「外国人留学生スキー講習会・小谷（おたり）中学校との交流会」開催される	2月8日～10日
3月4日	低温センター	第5回 低温センター研究交流会開催報告	2月27日
3月5日	史料編纂所	本部棟1階展示	3月3日
3月7日	本部学生支援課	体験活動プログラム活動報告会の開催	2月28日
3月7日	広報室	広報誌「淡青」28号が発行されました	3月5日

(2月15日～3月11日掲載分)

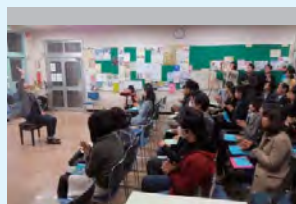
お知らせ

人事異動情報など全学ホームページ「お知らせ」(<http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/>)・東大ポータル等でご案内しているさまざまなお知らせを一部掲載します。

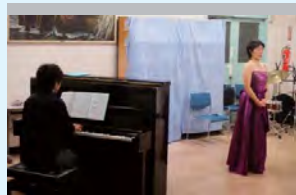
掲載日	担当部署	タイトル	URL
3月1日	本部人事給与課	人事異動（教員）	http://www.ut-portal.u-tokyo.ac.jp/wiki/index.php/人事異動（教員）
3月7日	本部評価・分析課	平成26年度 専攻の設置について	http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/1919/
3月7日	本部学生支援課	平成25年度学生表彰「東京大学総長賞」選考結果発表	http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/2046/
3月7日	本部学務課	東日本大震災により被災した入学志願者の検定料の免除について	http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/2053/
3月24日		退職教員の紹介	http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/2009/



CLOSE UP 「第21回教育学部音楽祭」開催（教育学研究科・教育学部）



学生によるロックパフォーマンス。



学生によるソプラノ独唱。

2月10日（月）、「第21回教育学部音楽祭」が、教育学部棟ラウンジにて開催されました。教育学部では年に一度、学生・教職員有志が出演する音楽祭を開催しており、大学院学生・学部学生有志を中心とした準備委員会が企画運営を行っています。同音楽祭は20年以上の歴史を持ち、今年で第21回を迎えました。

当日は、準備委員長である和田果樹さんの挨拶により開会され、コンテンポラリーダンスの即興パフォーマンス（AKB48等）、ロックパフォーマンス（尾崎豊等）、クラシックピアノ独奏（グラナドス）、クラシックソプラノ独唱（ヴェルディ）、ヴァイオリン・ピアノ協奏（チャイコフスキー等）、ロックバンド演奏（The

Beatles）、ポップスバンド演奏（あまちゃん等）、クラシック歌曲（モーツァルト等）、混声合唱（信長貴富）と、彩り豊かな全9組による演奏・パフォーマンスが行なわれました。身近な学生が様々な趣向を凝らした演出をなす姿は注目を集め、学生・教職員の観客を楽しませました。

準備委員会顧問の一人であり、自身もロックバンド演奏で出演した市川伸一教授より、「年々演奏ジャンルが多様になってきており今後の展開も楽しみであり、開催を続けていきたい」と閉演の挨拶の後、参加者・観客による懇親会が開催され、出演者同士で互いの演奏を称えあい、即興の演奏を披露しあうなど、にぎやかに親睦が深められました。



CLOSE UP

体験活動プログラムの報告会を開催（本部学生支援課）



島根で活動した学生の発表（踊り付）。



司会より開会の挨拶。



学内外関係者200名が出席。

2月28日（金）、工学部2号館にて、体験活動プログラム活動報告会を開催しました。報告会には、プログラムに参加した学生、学生を受け入れた学外関係者及び本学教職員等約200名が出席しました。

開会にあたり、司会の教養学部前期課程、木幡愛さんと田中大さんより、体験活動プログラムは「よりタフに、よりグローバルに」次世代を担っていく学生を育成するという教育目標のもと、学生が新しい価値観に触れ成長する機会である、と説明がありました。

濱田純一総長からは、学生を受け入れていただいた関係者への感謝の言葉と、体験活動プログラムを通じて自分の知識を社会へ役立ててほしいという参加学生への期待が述べられました。

続いて、5つのプログラム（島根県「公営塾をプラットフォームとした課題発見・解決プロジェクト」、フランス「フランス特有の高等教育機関での国際交流」、千葉県「地方高校における学習支援」、インド「インターンシップや公的機関等での国際交流」、東京都「院内学級

における教員補助」）に参加した学生が、体験活動から学んだことや将来に活かしたい経験等について報告しました。

学外機関からは、隠岐国学習センターの藤岡慎二氏、エコール・ポリテクニクの郡山幸雄教授（ビデオレター）、文理開成高等学校の鈴木淳理事長、品川区立清水台小学校さいかち学級の副島賢和教諭より、学生を受け入れた感想などが報告されました。

最後に、体験活動の推進に関するワーキンググループ座長の太田裕幸理事・副学長より、体験活動推進に関する実施体制や、体験活動プログラムの評価・成果について総括及び報告が行われ、盛況のうちに終了しました。

報告会後に開催された懇談会では、学内外の関係者が活動を振り返り、意見交換をする有意義な交流会となりました。なお、本報告会実施にあたり、約20名の学生が企画・立案から当日の司会、受付及び会場案内などの役割を担い主体的に運営に参画したことは、本プログラムにおける成果の一つの表れとなりました。



CLOSE UP

明治天皇自筆の御沙汰書などが本部棟1階に登場（史料編纂所）



右上が明治天皇18歳時の直筆の書。



明治維新期の日本の写真がパネルに。

本部棟1階ロビーでは、史料編纂所の研究活動などの展示を行っています（5月上旬までの予定）。

史料編纂所は、国の内外に残されている古代から明治維新に至る日本の歴史に関する史料を蒐集・研究するとともに、その成果をふまえて、日本史研究の基礎となる史料集を編纂・出版する研究所です。

今回の展示では、史料編纂所を短い時間で少しでもお分かりいただけるよう、研究所の歩み、概要と事業、研究プロジェクトの一つである「古写真研究プロジェクト」をパネルなどで紹介しています。

さらにショーケース内では、約30万点ある収蔵史料のうち「明治天皇宸翰御沙汰書」、「米国使節ペリー渡来絵図写真帖」、「南無阿弥陀仏作善集」（いずれもレプリカ）、史料集からは第1号の「大日本史料 第六編之一」（1901／明治34年）や最新の「大日本古文書」（2013／平成25年）などを展示しています。

VTRコーナーでは、研究内容や史料保存技術室の活動内容の研究科教職員による説明を映像で紹介（東京大学創立120周年記念事業「知の解放」（1998／平成10年）の一環として作成）しており、お時間がある方はゆっくりとご覧いただければ幸いです。



CLOSE UP 「淡青」28号発行（広報室）



広報誌「淡青」28号の特集は「イノベーションと東大」。革新、刷新、新機軸、新しいもの……。様々な言葉で説明されるキーワードでキャンパス界隈をサーチするとどんな検索結果が出るのでしょうか。「大学」「好奇心」「研究」「組織」「起業」「教育」「学生」とのAND検索で、東大式イノベーションの現在を紹介します。乞うご一読！

※<https://webform.adm.u-tokyo.ac.jp/Forms/tansei28/>
で実施中のアンケートにもぜひぜひご協力お願いいたします。

平成26年度学内広報スケジュール

号数	配布日	号数	配布日
1453	4月30日	1459	10月31日
1454	5月30日	1460	11月28日
1455	6月30日	1461	12月26日
1456	7月31日	1462	1月30日
1457	8月29日	1463	2月27日
1458	9月30日	1464	3月31日

別冊発行に伴って号数が変わることがあります。



情報量増大と数・時間の認識

周知のように、最近の情報化社会の変化の速さは目覚ましいものである。情報化の基本となるデータの量はB（バイト）単位で表されるのが普通だが、1970年代、データを紙テープにパンチしていたころは1kB（1キロ＝1000、3桁）がデータ量の目安であったと思う。1980年代初めのパソコン登場の頃は、目安が100kB（100キロ＝10万、5桁）に増大していた。1990年代の初め、数十万円の研究費で購入した100MB（100メガ＝1億、8桁）ほどのハードディスクが使用3年にしてクラッシュした苦い思い出があるから、10年間で目安は3桁ほど増えていたわけである。その後の20年間で、目安はGB（ギガ＝10億、9桁）、TB（テラ＝1兆、12桁）とますます大きくなってきた。さらに、筆者の所属する宇宙線研究所で建設中の重力波望遠鏡KAGRAは、完成後数年で1PB（ペタ＝1000兆、15桁）を遥かに越える量のデータを吐き出すそうだ。1PBを400字詰原稿用紙（＝800B）に換算すると1兆2500億枚分となって、その分量は想像を絶する。しかし、パソコンの補助機器として普及している携帯用ハードディスクでも1TBは入るので、1PBはその「たった」1000台分であり、本郷キャンパスだけでもその程度の数の携帯ハードディスクがありそうである。幕末から明治維新の世の

中の変化の速さを表す「一身にして二世を経る」という福沢諭吉の有名な言葉があるが、データ量のkB、MB、GB、TB、PBの段階をそれぞれ「一世」と数えれば、「一身にして五世を経る」感あり、と言えるのではなかろうか。

ところで、上の括弧内にも付記したように、大きな数の把握には桁数表示が便利である。数学的には常用対数表示ということになるが、その背景には十進法がある。背景を二進法に変えれば倍、4倍、8倍、16倍、... となるわけである。昨年「倍返し」が流行語になったのも、「倍」という比較法が感覚的に掴みやすいことがあるのだろう。時間経過の認識にも似たような感覚があるようで、50歳を越えたころ、100年、1世紀という歴史の切れ目が急に身近になった気がした。これまでの自分の人生の倍として認識できる、と感じたわけである。この時間認識の感覚が心理学的あるいは脳生理学的にどのように理解されているのか、専門家の教えを乞いたいと思っている。

寺澤 敏夫
(宇宙線研究所)